

集落の話の聴き手だより

第16号

2025.01

今日は... 佐口



- ・佐口へ登る坂はかなり急であった
この坂を見て嫁入りをためらうこともあり、
「嫁止めの坂」と呼ばれるほど急だった
- ・旧八千穂で最初に集落排水ができたのは
佐口だった
- ・佐口湖と十日夜の思い出

語り手

井出 由利子さん
小澤 小市さん
井出 和廣さん
櫻井 真一さん
井出 はるこさん

堰は人力で！ 人工池「佐口湖」と土地改良

佐口といえば、「佐口湖」。これまでの集落の取材でも、昔は佐口湖でスケートをしたことがよく話題になっていました。みなさんに佐口湖について伺うと、「佐口湖は、土地改良事業で必要になって作った。堰を作るときにな、トロッコで土を運んで、人力でそれを締め込んだ。」と、和廣さんが話し始めてくださいました。

佐口湖は昭和20年代に、食料生産力の向上を目標に土地改良事業の一環で作られました。堤防は人力で作られたものですが、「はがね」と呼ばれる土を固めた堰の基礎となる所はとても強固に作られていて、数年前の水害で外側の土手が崩れても、決壊しませんでした。

水は、大岳川を取水にする円形分水から引いてきます。水が流れる穴の数によって取水量が決まっていて、佐口、上区、小山用水（高野町）へ水を分けて使います。円形分水から佐口までの水路の管理は、佐口の水利委員が代々担っています。水利委員の経験がある和廣さんは、「円形分水から佐口湖までいく2キロくらいの水路は、土砂崩れや倒木もあって管理するのが大変だった。今は、蓋がかぶさっているけど（和廣さんが水利委員の頃はなかった）。」今でも、佐口の水利委員が水路や佐口湖を大切に守っています。

佐口湖の開発に伴って、桑畑が田んぼに変化していききました。

「昔は養蚕で生活していて桑畑だったのが、みんな水田になったわけ。（開発の）始まりは機械（大型重機）でどんどん平らにしてくれたけど、その後は個人ごとに家族で（平らに）したから。お嫁に来た頃は大変だったの。」と、由利子さんは70年ほど前の様子を教えてくださいました。

土地改良が終わると、専業農家である花卉農家や酪農家が増えていきました。佐口の花卉農家は、昭和30年ごろ花岡から菊栽培について学び、7、8軒ほどが始めたそうです。



お話を聴かせていただいたみなさん。

その後、佐口の花卉農家は最盛期には40軒にもなりました。今では、国の事業で施設園芸（大型ハウス）が導入されて、カーネーション栽培も始まり現在も続いているそうです。

由利子さんは「一生懸命働いたよ。北海道とか、九州、沖縄、いいところいっぱい行ったね。」と、花卉農家仲間たちとの思い出を楽しそうに教えてくださいました。



現在の佐口湖の様子。
大きな池を人力で作られたなんて驚きました。

佐口湖でのにぎやかなスケート大会

佐口湖の恩恵は農業だけではありませんでした。冬には氷が厚くなるため、南佐久乙組（旧白田～旧八千穂まで）のスケート大会が開催されました。みんなで弁当を持って大会に参加したそうです。冬も、佐口はにぎやかだったのですね。

また、土地改良事業で米などの生産量が多くなったことで、農業倉庫も作られました。倉庫の近くの広場で盛大に盆踊りをしていたことも、懐かしい思い出なんだとか。盆踊りで活躍したのは、佐口の青年団です。「盆踊りから何から、青年団がみんなやった。」と、真一さん。集落の行事や、八千穂北小学校までの約2キロの通学路の雪かきも、青年団が協力しました。

早起き野球やソフトボールもさかんに行われていました。「まあ、弱かったな。」と笑いながら話す小市さんは、野球チームの初代監督。勝ち負けに関係なく、みんなで集まって楽しく活動していたそう。

はるこさんは子どもの頃、佐口湖のすぐ下のため池でよく遊んだといひます。「夏にはキュウリやトマトと塩を持ったりして、水遊びに行ったんですよ。」

この池は佐口湖ができる前からあったそうで、ほとりには、水神様が祀られています。はるこさんが子どもの頃は、池の西側に大きくて立派な松の木があり、その横に祠があったそうです。現在の祠は池の南側にあります。その池を見守る姿から、当時の水の大切さが伝わってくるようです。



此の入池（下の池）の水神様。
集落に向かって建っています。



佐口湖へ水を送る円形分水。
うその口集落の手前にあります。

十日夜とマケのお祭り

盆踊りから話題は行事へ。昭和54年発行の『佐口民俗誌稿』があるように、佐口は民俗の伝承が色濃く残っています。そのひとつである十日夜（とおかんや）。佐口では今でも、続いています。十日夜の当日までに、田んぼの神様に感謝してお餅や作物をお供えし、田畑からかかしを持ってきて庭先に飾る家もあります。当日には、子どもたちが「十日夜、十日夜。十日夜のわら鉄砲。夕飯くったらぶったたけ。」と大きな声で歌いながら、わら鉄砲で庭先の地面を叩きます。叩くことで、モグラやムジナ（アナグマ）を追い払うといわれています。

わら鉄砲は、真一さんいわく「壊れねえように作るのが親の腕の見せどころ」なんだそうです。子どもが力いっぱい叩く時にいい音がするようにと、中にはみょうがの茎も入れたそうです。佐口のどの家庭でも子どもや孫に、わら鉄砲を作ってあげるんだそうです。

現在は、十日夜に来た子どもたちへお菓子を渡しますが、みなさんが子どもの頃は、お供えしたお餅をもらってきて、公民館でみんなで分けあったそう。

佐口の井出マケでは、5月には八十八夜のお祭りも行います。また井出・小澤・櫻井・山田の4つのマケでは親戚で集まって、各々の神様仏様にお参りをし、そのあと食事会を行うそうです。

井出マケの由利子さんは「八十八夜のお祭りと言って、親類ごとにやるわけだね。私らは井出マケだから、お大日様（大日如来）。」と教えてくれました。同じく井出マケの生まれのはるこさんは、弟が生まれるときにおばあさんに連れられてお大日様に安産を祈願に行ったんだとか。佐口の集落の山には、それぞれのマケの祠や神社があるのだそうです。当時はもっとマケの神様との距離も近かったんですね。



40年ほど前の十日夜の様子。最後列の男の子のわら鉄砲は少し壊れていますが、そこも楽しいようでした。

「ここの集落の衆はなんかあれば、人に任せるよりみんなで作るかっていうのが根底にあるから。」

聴き取りの中で何度もこの言葉が出てきました。暮らしをよりよくするために新たなことにも挑戦しながら、昔からの慣わしも大切にしてきた佐口のみなさん。地域への想いが、行事を通してこれからの世代にも伝わっているのだと感じました。

お話を聴かせていただいた みなさんありがとうございました。	聴き手	川嶋 大波多	愛香 志保
	文章	川嶋	愛香
	編集	櫻井	麻美
	デザイン	西澤	ユキ



大日向2区と人の暮らし



国道299号沿いにある大日向小学校前を左折し、旧武州街道を上がる最初の集落が大日向2区である。2区は十角平、水堀、矢沢、宿戸、刈又の5つの地名に分かれている。



大塚喜八さん

大塚喜八さんは、矢沢で生まれ育った。一度も県外に出たことが無い。若い頃は東京に憧れたことはあったが、出ていく勇気がなかったそうだ。「一人息子だったので、お袋を残して出る勇気はなかった。それより家を継ぐ意識が強かったです。小学生の頃は何しろよく遊んだ。家に帰っても誰もいなかったし、その当時の子どもは暗くなるまで外で遊びました。昔の親は『勉強やれ』なんて言わなかった。じっとしてるのがやだくて、運動きりしてました。矢沢には10人くらい子どもがいたので秋の稲刈りあとの田んぼで三角ベース野球をしてました。今でも覚えているのは、矢沢には竹やぶが多かったので、七夕時分になると笹竹を採りに行きました。当時よくいじめてた子がいたんです。その子連れした帰り、その子の父親と道でばったり会ったんです。『おめーか！おらっちの子どもをいじめてたって言うじゃねえか。』と、ものすごい剣幕で怒鳴られたことは忘れられません。何しろ家にいたためしがなかったから、夏は抜井川で水泳や魚取り。ハヤ、カジカ、イワナがいました。よく捕れたのがハヤとカジカ。カジカは骨が硬く、あまり美味しくなかった。手づかみか縫い糸の先に針をつけて取りました。冬はスケートです。小学校の下に田んぼリンクがあったので、そこで練習をしてました。大会があると、みんなトラックの荷台に乗って、佐口湖へ行きました。

6年生の時は優勝したことがあります。」と懐かしそうに話してくれた。

喜八さんは定年退職後にいろいろ発見があったと言う。先祖は江戸時代から続く商家で当主は孫左衛門を名乗り、十石峠を越え、群馬の村にそうめん、わらじ、お米を売る取引をしていたこと。酒造業を営んでいたこと。群馬県立文書館（前橋市）には取引した時の手紙が残されていること。6代目孫左衛門が大日向5区にある龍興寺に鐘を寄進したこと。秩父事件後は8代目、9代目が若くして亡くなり、没落したこと。屋号は塚本屋で喜八さんは孫左衛門12代目であること。時間があったので、いろいろ調べると先祖のことが分かったと嬉しそうに話してくれた。

喜八さんは、去年から菊づくりに取り組んでいる。時間がたっぷりあるので、何かやりたいと思って始めたそうだ。「よくそんな気力があると言われるけれど、じっとしてられない性格だからね。」と笑いながら答えてくれた。



小6時代の喜八さん（右端）

.....
大塚力さんは刈又で生まれた。同級生は6～7人いたし、一つ上や下にも小学生がいたので、その子どもたちとよく遊んでいたという。

「昔の子どもはよく外で暗くなるまで遊んだ。夏は、抜井川で魚取り、カジカを捕って焼いて食べた。美味しかった。親父たちが石を積んで、水の流れをせき止めてくれたので、腰の深さまであり、水泳をしました。冬になると、親父が作ってくれたソリで暗くなるまで遊びました。服がびしょびしょになってよく怒られたのを覚えています。あとは、釘さしやパッチンかな。パッチンで覚えているのは、直径が30センチくらいの円形のメンコで遊びました。勝ったり負けたりでした。メンコは矢沢にある雑貨屋まで買いに行きました。学校まで20～30分かかったので、帰り道は山に入り込んだり、秋になれば、道路わきの柿を取って食べたり、畑の小さなカボチャに字を書くと、カボチャが大きくなると字も大きくなるを見て、喜んでました。よたっきでした。」と懐かしそうに語ってくれた。

力さんの家は、養蚕農家で生計を立てていた。春、夏、秋、晩秋の4回繭をとった。

「蚕をたくさん飼っていたので、手伝いは当たり前。背負子に桑の葉を入れて何往復もしてました。『おかいこさま』だから、私たちは隅っこで寝てました。蚕は暖かくしておかなくてはいけないので、夏でも囲炉裏に火を起こしてました。だから、天井はすすだらけ、仏壇も真っ黒でした。やだくてやだくて仕方がなかったのは、お田植えでした。まだ水が冷たくて、嫌でした。今でもその時の手の感触を覚えています。ただ、蚕にしろ、お田植えにしろ、近所の人を手伝ってくれました。こっちも手伝いに行きましたが、持ちつ持たれつの付き合いが強かったです。山羊の世話が私の役割でした。餌やり、散歩、乳しぼり、敷き藁の交換、全部やってました。その代わり、乳を売った代金は私の小遣いになりました。そのお金で、叔父さんが買ってくれたカメラの現像や焼き増しに使ってました。東町にあるライト写真館まで自転車で行ってました。」

そのカメラ好きが影響したのか、大きくなって就職したのが、カメラのレンズ製造会社。勤続49年で退職。今は、薪ストーブの薪割りに忙しい毎日を過ごしている。



大塚力さん

.....
浅川洋治・智伊子さん夫妻は、洋治さんが矢沢生まれ、智伊さんが古谷生まれである。洋治さんの子ども時代は、小学校へ行くどろ道は狭く、両側には桑畑が広がっていた。学校は近かったので、寄り道はしなかったという。「柿の木は矢沢までしか育たなかったのが、古谷まで帰る子どもたちは、秋になるとよく熟した渋柿を石で落として食べて帰って行ったのを覚えてます。家のすぐそばに抜井川が流れていたのが、夏になると魚取りをしました。その当時は、石をまくと必ずカジカがいました。それを水面とやすで捕りました。ハヤもイワナもいました。気持ちのいいほど捕れた。でも自分で捕った魚は一匹も食べなかった。なぜかわかんないけど.....。」と洋治さんが言うと、智伊さんが「私は美味しく食べた。」と口を挟む。

「家は、養蚕と炭焼きで暮らしを立てていました。お父さんは毎朝5時起きで、自転車で古谷まで行き、そこから1時間くらい歩いて山に入って炭焼きをしてました。

檜の木で炭を焼くのですが、窯の中の場所取りはくじで決めてました。一度、炭焼きの手伝いに行ったことがあります。高い沢を登って行くのですが、足元は急斜面で、踏み外したら落ちて死ぬんじゃないかと思いました。炭焼きの場所で、私は原木を長さ1.5メートルぐらいに切って、炭焼き窯に入れる手伝いをしました。覚えているのは、お父さんが囲炉裏の傍で足を温めながら足袋を履いている姿です。毎朝山に入って炭を焼き、背負子に炭を背負って帰って来ました。」と洋治さんは話してくれた。

智伊子さんにも子ども時代の話をついた。

「古谷から学校まで4キロぐらいあったので1時間はかかりました。帰りは、桑畑の中を通りました。めど（桑の実）を食べながら帰ったので、遠かった思いはありません。怖かったのは、その桑畑の持ち主が犬を放し飼いにしていたので、吠えながら追っかけてくることがありました。冬は道路わきに掻き上げた雪にあおむけに倒れ込んで、誰が綺麗にランドセル跡をつけるかという遊びをしました。勉強、勉強という時代ではなかったのが、のんびりした子ども時代でした。お手伝いで覚えているのは、田んぼの代掻きです。土手の草刈りをして、その草を田んぼに入れる。鼻緒をつけた板を履いて、踏み敷く手伝いです。子どもの力ですから、そんなにうまく代掻きは出来ません。浮き出た草の間に稲を植えたことを覚えてます。家の手伝いはやるもんだと思ってました。楽しかったのは運動会です。小中合同の運動会で、450人ぐらい生徒がいました。家族そろってお弁当を食べる楽しみがありました。

冬はこたつに入って近所の友達とカルタ遊びをしました。今でもどんなカルタか覚えています。『㊄いようの熱は6000度』、『㊄きまでだいたい10万里』、『㊄っぼう伝来種子島』」智伊さんの口からスラスラ出てくる。

洋治さんは、中学卒業後、昼間は簿記学校に2年間通い、夜は臼田高校大日向定時制分校で勉強した。卒業後、大日向農業協同組合に就職、佐久町農協、南佐久農協を経て、退職。現在は自家用のコメ作り、野菜作りに精を出す日々を送っている。



野球部で長ぐつを履いて野球をしていた洋治さん（前列左から2番目）



（文責 西村寛）

